

## 海について

○  
満月とまがふ額に手をおき、ゆきずりにその女童を祝福する。夏の微風とも覺しき涼しい風が幼女の眸から散る。眞實私は月世界の人であつたか。反省はひとすじの砂間の小徑であつた。はまぐるまの匂ひ、てりは野茨は青く。天日の下に私言き散る、灌木の實の夢の世界……

182

○  
海……道德の廢れ、悔恨はここにあへなく終結する海であるか。神話が呼ぶいま

民族の殺戮、數、量、——生理、否、叫喚の場……海瀛は半圓であるか、いつも。

砂丘の彼方、海が、地表の焼ける赤土の街衢の生理に、紅蓮の鏡となるか。

葉蔭に秋の花の笑ふみちを歩いて……松間に洩る陽の網の目に秋蟲どもの琴を置かせしめよ！ 胸にまろき陽光をうけ、そこだけの明い秋暖をいとほしむ。白芽の尖きはつねに傷心の海風をまつべきもののやうにあるのか。

砂舟の散らばひ、足許に漣網の擴げられた小童の日の海であつた。

183

……海の不幸について。磯の香と風の童への日に芽吹けるものが、かそけく胸に揺れつゝの道に。突如として——肩をくみあひ巨人の影繪が砂の丘を降りてくる。それは、この海邊を淫する學生の習俗といへるもの、——うみの不幸なる日は茫漠たるその海に背き、砂山の蔭なる窪みに臥す。枯れいそぐ濱麥の穂尖は白雲を泛べて動く天心を指す、終日……

○  
ある夜。叢にエトルリアの素朴な壺を拾つてから、海のいたく吼ゆる夜々を私は洞窟に訪れた。葩びらのやうに星は私の前に散りしまき、狂へる怒濤は泣いた。盲龜も浮ばず、そこに普賢勢至も顯ぜず、これなる一個の世界！ おお終ひに私は古代の壺を碎いて去る！ 碎かれぬ童話について月を掠める雪が囁く夜であつた。

湘南茅ヶ崎の海邊の、母と妹の住む家で偶想としてこの詩を作つた。父はこの家を建て、翌年の春、私の一人の弟を失ひ、日支事變勃り、その翌年の新春、朝鮮の旅行から歸ると、父自らもまた肺炎で急逝した。この詩は、直接にはないが、それらよりする雑多な記憶が入り込んで來、影像されてゐるかもしれぬ。もとより高度の構想もなく、たかい理念もなきものといふべきだが、母と妹がいまは病を養ふだけの家となつた荒い海の家で、私が日頃この二人の肉身と住むことの少きために、その乏し

き日の懷出にとこれを書きつけた。

鏡に拾ふ……

鏡こそは概して私と俱にあつた。

手鏡に小さな顔や、掌を翳すことを覺えたその日から、自分の人生の表情を知りはじめたのかしれない。喜怒、哀歡の情を、この蒼く湛へた隋圓の中に拾つてから、幼い心に、それで無限を截取り、有限から無限を展開することも覺えはじめた。童心の鏡に、貝も花びらも蒐めたが、——やがて消したり書き加へたりする、私の呪文のやうな原稿紙の表に、おなじ鏡の惡魔の嗤ひを拾つた、慄然とした。……

色彩のまつはる冷い淋雨なごめが降る…… 私は、小判形の懸鏡を購めた。金色の愛憎の蛇が縁りを巻く。——事變でもう磨きの硝子など出来なくなる、さう、それを賣

つた男はいふ。

——谷のやうに低い雨の街、……崖の上の、事實、遠い旅の果ての風のやうに、纏りのない、私の五邊形の室にも、細い雨の針が光る！ 購め歸つた鏡の表にも雨が！ その背景をなす埃塗れの壁の空漠の中に、このさき生きて行くことの意味が見出されないとしたら、それを何處に探して行くといふものか、調子のこはれた廻轉椅子に半圓づつ私は旋りながら。……

まだ、鬼も蛇も出盡したとはいへない私に、これからはどんな花が、この鏡の裡に亂れることか。

「よく、まあ、——變んなものばかり買ふ」

——扉を排して入つて來た一人の女性はいふ。

おなじ二人がその一度の生涯に二度も愛するといふことがあらうか、二度も憎むといふことが、それがどういふ意味なのか。さうしてさらに幾度かも……？ 御身

ら致命の女性よ！ 少年の日も過ぎた、青春もまた私に。

旅もした、この年も老いた。まどかな月が出る。あの、電燈を消して寐た、五邊形の私の室にも蒼い月が差込む。——早、一年、あの室も終ひに見捨ててはゐるが……

この夜、漂渺とした平野の満月に粧はれ、地平はまた女性のやうに甘美しく變貌する……ここに於て一人で拾つた、あまり完き鏡の裡に於ては、心も辛い！ もう托鉢でもするか、さうして感謝でも。

人情も俗世も、私にはこの上は憎まれない。……とりわけ若さだけで藝術など口にし、次々に野良犬のやうに去り果てて行つた者共、その者共とおなじこの夜の露を祈らうか！

## 秋 冷

あさ。小鳥が群れ飛ぶと、黒い山嶺が目覺める、——まだ微風の動かぬ青空の前で。朝は深い秋冷の谷間、高原の邑が彼方におそく起き出すまへ、彼は既に一つの人生を終へる。……

頂きを境に鳥が群れ飛ぶ。鳥共は明暗の一線を飛び躰えてはすり墜ちてくる、——紙芥のやうに。それは嚴かな大河を徂く水泡の花とも見られぬことはない。生ある日の限りの営み！

黎明から日の出にかけて、山のバルコンに立つ人は、——空と山嶺の劃然たる一線が心にしみわたるので、彼は、そつと絹の繩梯子を、太初の豁のしじまにむかつ

て抛げるのだ。そして、翡翠と黝との、明暗の二つの世界を昇降しはじめるのだ。何千回何百回となく、その絶対の境を、——遂には自己の谷間へ真直ぐにすり墜ちてくる。花々の死んだ豁を俯瞰ろしながら。……

朝日が河床をつくる——陽は裾より嶺に及ぼす、だんだら縞を刷いて。……山系は青と藍との數十の系列に染め別けられ、前山は尾と鱗を戦かせながら。何といふこの静けさか、涼風は谷に目覺めてゐた。人の世にあるや歡喜とはすでにかくの如きか、沸き立つは小鳥等の如きか、——冥府からするレモン色の光被に、その人は身を以て一躍する！

……仰ほに筏を組む人の睫毛に朝が絡はり、その人はすでに淨罪の海波に浮びながら、——無窮の空の窓をあほぎながら、「功罪天にあり」と呟くのだつた。そして白帆のやうに溟々の波を蹴つて脱走した、再び、自己の内部へ。

朝日が遍く照り添ふと鳥は網の目を散らす、石を擦るやうな短い叫びとともに。

鳥共はすでに今日の営みを終へる。

第四部 詩と散文

昭和十七年より  
昭和十八年に至る

さえずりと夜鷹は啼く

……耿子、あの色は美しいな、とそのときなぜ幼いお前のために、瞭りとそれを  
させておかなかつたのだか。いいな、と私が言へばお前はただ、ううん、とだけす  
ぐに應へかへしてくるのだ。私達はわが家の木立の間につつまれてゐた。お前と私  
の二人だけのその離屋で。人しれず盈ちてゐる月魄のやうなお前の顔かんはせにうつる樹々  
の映りかへしの海の中で。私には努力を集めて翻譯する書があつたのだ。そのとき  
お前は、森の中、岩の上のお城の王子さまや王女さま、王女さまのゆびの血を吸ふ  
魔女の譚のつづきを讀めとせがんだ。私にむけて尖らせたその小さい唇は、これだ  
つて勉強ぢやないか——と、いままドイツの田舎に生命をたもつてゐる傳誦のそれ

をせがむのだつた。お前は俯せになつて、木の間からとほいあらぬ方の空を見て、見入つてゐた。子供たちのために神さまは、みち溢れて静かに湧くやうな、深い色合をそこに溶かしておおきなさつた。耿子！ お前は神さまと人間の世界に色といふもののあるのを意識の下で、流れるやうに想つてゐた、お前は寝入つてしまつた。一歳、二歳、三歳……とけふもおなじであるこのよでただ一つの額髪の貌が。

お前は一度起き上つて、おしつこをしてくると、黙つて私の案のむかうに倚れてゐたが、ふたたび疊のうへにね入つてしまつた。瓜を喰べないかと訊ねても大好物のそれもたべようとはせず。またむつくり起ち上つたときには、私は、けふはお湯に浴らうときいた。このごろ倦怠いから、などと、あらぬことのやうにそれにはこたへ、また睡つてしまふのだつた。白銀も黄金も珠も何せんぞ、——經の中の偈を朗々と私が諷誦するあひだ、刻は翅搏いて經つた……

それは旅の車窓にちかい私一人の風景であつたかしのれないが、でも軽々しくはかさんがへたくはなかつた。一億敢闘とか、武運長久の立牌と同時に宇津の救命丸や皇國葡萄酒のおほきな文字が視野を亂す。——緊要にして必須な言葉の生命が如何に易々と目前で色褪せてゐるかといふ日本の現状について。今日の日言葉が多すぎる。歴史の瞬間に重大な言葉が恣意自在に變容する。

童等は野川の逆りに浸つて歡聲をあげる。栗色の女童の裸形から、太陽の雫がこぼれて、——もう赫々とした、この宵壤の大いなる秋であるばかり。

屋敷林の樺や村社の杜や、鬱々とした邑里の緑がこの乾坤をささへるさかんな柱のやうに噴きあげてゐる……

——人寰をはなれ斧鉞をしない國境の深山木の群落が、錯落と、蒼い鏡の裡に錯倒する。

樹木はそもそも何をいはうとしてゐるのか、——何を！ 無言、烈火のやうな志



りをば空に焼きあげてゐるのだらうか、それをば、私達人間を拒否するものとして、——木靈は火のやうになつて、彼等のいまのありつたけを生きてゐるのが識られるではないか。

私はまた、敵を考へ、かの敵を利するやうな浮薄な、ひしがれた物情をおもつた。猶ほ私達の村のことを。私と、そしてお前のどの先祖もが、それを一生涯の仕事として終つた、なんの特徴もない無名の一部落の生成發展の歴史である。このさきさらに私達の手で子孫に引紹がねばならない、嚴肅な將來についておもつた。農民の純い部面とさうでない脆い方の面とを。お前のいのちもまた、おまへらの子孫をとほして、清冽な一つに貫くいづみを、かたい磐の底から汲みあげねばならぬ責任があるし、指先も干切れるほどの、その先祖の井水の汲手なのだ。そのひびくやうな井戸掘の仕事なのだ！ でも、誰がまだ名利羅利の鳥翔と翳から安全だらうか。

お前と二人で、童話を讀んだり歌をうたつたりして見て暮した、この數日のあひだの、木蔭のわが家の空のみごとさには及びはしない、——だが、私達は造化のつくりさだめしものに抗ふ、いつたいいまなにを持ちあはせてゐるのかしら。私も、そしてお前としたことが、そのものの利劍のまへに一閃すかりと斬り据へられることをこそ、こよなくうけ取つてゐるばかりだ。私は木靈の拵籠の厚い鳥翔に乗せられ、くるり、くるり、寶行樹のこずえ木末のそらを天翔つた。無言と放心の碧い胸に身を托して信賴のただ中を。……けさお前は、いつものやうに髻髪をふり振りながら、わつ、といふ歡聲の下から私の方へ躍んできたのだ。それだのに、——それだのに、私は、うるさいつ！ と自分で駭いたほどの鋭いこゑになつてゐた。併し一切義佛の叡智に劍を刃向けることこそ、またしても、淺間しい。なほ澄みはてぬものはすみゆかねばならない。

——私はもうこの家から出ることは出来ない 死の夜まで

木隠れの家で、——まはりに散りくる赤と黄の病葉が

さまざまの言葉の身振りをする 私はいま言葉を怖れるのだが

時の女童<sup>わすた</sup>とただ二人ゐて、ここでは私に生ちの貴ぶべきそのほかのことは識る  
を宥<sup>な</sup>されない

私のうゑた木は私を譴<sup>とが</sup>つてゐる 沈黙のかぐろい石になれ 石になれ

と、——去る一夏、樹木と神といふ詩の終りに私はかう歌つてゐる。そのおなじ  
木隠れの家で、お前が三才の夏のその終りに。

どろ、どろつ、といふやうに、幽かな音がきこゑた。その家人は、浅間<sup>あま</sup>焼<sup>い</sup>けで  
すと、訝<sup>あや</sup>かるやうに聴耳<sup>きこみみ</sup>を立てる。ほんの微かな宇宙の聖なる伴奏によつてだけ、  
人々の心は誠にむかつて鐘のやうに冴<sup>さ</sup>えゆくものだ。浅間の麓の黄昏を前にして立  
つてゐた。私達は、比ひなく美しい民家の藁<sup>わら</sup>屋根をうしろにして、見えわかぬ噴煙<sup>ふんえん</sup>  
に向つて。

山甘草、白はは子草、すすき……。

秋の野に咲きたる花を指折<sup>さしよひ</sup>りかき數ふれば七種の花

萩が花尾花葛花なでしこの花おみなへし又藤ばかり朝顔の花

其二

萬葉集 卷八

草の露の茂みを西の斷崖の方へと歩みよつた。残照が、まだ山の一方に最後の光輝を炎えてゐる、そこだけがあらたな夜からかつきりとくべつされて、ふかい血脈の血のやうにもえ立つてゐる。そのむかうになにがあるかと想つて、私の足は、吸はれるやうに歩みよつた。

202

とほくろてもつねにちかく、私の信頼を寄せるものよ、——お前は、まだ形の整はぬこのよの果ての銀河の下の家でお眠り！ びちびちと肥えた久方の天の河瀬の稚魚のやうに。

宵の民家の器物の觸れ合ふ響きが、ややとほいところの水音と混り合ふ。頭の上

で夜鷹が冴えざえと鳴き交しすぎゆく。この天地宵壤をひとつにつらぬける心、寂びとなる。ああ、つねに身にちかくしてしづかなる、それにこの炎ゆる生きの信頼を托するもの。……

203

秋の言葉より

○

流れるいのちに從つて生きよう

本<sup>もと</sup>なるそれに廻はず

けさ立つたばかりの秋のやうに爽かに

さうしてこの上ないさだかな秋のやうに萬象にしみこんでいきよう

○

はなのやうに咲<sup>ひら</sup>く

白蓮の花のやうにひらく

すぼんと、くうかんの青きが上に擡んでてひらく

敵機

敵機百數十機

南鳥島に來襲せるといふ

この二百十日の靜かな朝

口をすすぐ

口をすすぎながら

秋草深くなくむしをきく

顔をぐつと水にひたして

だんだん高く石にひびいてくる蟲のねをきく

心靜かなこの二百十日の朝よ

○  
一生を持ち越してただ一度の度しい花を

くさだちの一つの莖が捧げる —— けさ

子供が去つたあと

子供がさつたあとは

波の退いていつた渚のやうだ

いろいろの花や 木の實 ちり芥さへのこしてゆく

又

碧玉のやうな

小さい柿の實の二つが

朽ちた切株にならんである

つぶらな澁柿の實のその二つ、

汚れない心があたりを領してゐて

けれんない涙のやうに光つてゐて

創られしものさざめ言をいつてゐる

○

白雨のやうに降りたてて

無にかへるべし

秋の貌

澤山の石のなかに

私のすきな石の貌がみえる

彼等の哲學

蟬なく

夏また立ちかへらんとす。

人無に至らんとすれば

自然の他の何をてがかりとするや、

時代蛙鳴蟬騒の徒

なによりてか本元にいたらんとするや



秋の光

秋の陽はなぜ黄金を浪費するか

おのづとそれは浪費にも見えるのだらう  
にほふばかりの蔭翳のもつれめにも  
ひかりは浮きそふてる

○

全く夏は去つたのだ

雨のおとと

日のひかりと

青い葉のなかでにじみあふてる

蟲がさんと泣いてゐる

このなかで私があをい秋となる

このなかで私の考へることが祈りでないといふことはない

ばせう

芭蕉の 裂けたばかりの

あをいはに

ひかりとこゑの 懿けさきはまる

風羅とも寂びともいへ——

これをさうと知るまではさう容易ではない

ひとつの 開花

あらゆるざつ音は去つたのである

木立のあひだで瞑目してゐると

急にばさばさといふ音がきこえ ながいあひだきこえた

こんどは蟬がくもの巢にかかつたのだとおもふ

啞蟬であるとおもふ

それから油蟬、つくつく法師などいつそうさやかにきたてた

ゆふひはさむいほど鮮明に木立をそめた

これらのことがらのつぎに天界にどんな審判があつたのかと思ふと  
それを識りたいばかりだ

晨

土におかれた玉葱から莊嚴淨土のいろのやうな  
青い芽を噴きあげてゐる

生命の玉のやうな純まさをかんずる朝である

秋のひかり

光りは

物體によりそふて秋となつた

木の幹にあつてはしづかな時間の斑となり

私の身にもしらぬまにひかりはちかくそふてゐた。

その強くして微かな、

光のたかい心がよりそふてゐる

鐵びんにあつては墨のいろとなり

花のいろに入りこみ

蔭翳にさへそふて

うつくしい無数の死の面貌おんほを描き出すものとなる

大空の聲とも、ものの響きともなる

こころと秋のひかりとをくべつすることは

困難をかんずるほどそれはうつくしい。

○  
秋になつて眼の先がひろくなつた

土につらなつてゐてすべてが美しい

葉

秋になると葉はなぜあかく

あかるむか

多くを捨てたところが

あかるいふゆをまつばかりだらう

事 實

神があるかないか私はしらない  
ただ、人間のこころも木々の葉達も  
いつ生涯を通じてそつちへむいてゐるといふ事實があるばかりだ

木 末

この日 樹は烈火のやうにその心<sup>しん</sup>では  
じゆんすいな悲りに灼えてゐるのかもしれないのだ  
さうであつても木末ははるかに金色の微笑にきえ入るほど

圓滿具足なみほとけの相好をかかげてゐるほどに

跋

## 鶯の來る庭での對話

庭梅は序の口の綻び。日南のペランダに籐椅子二脚。それに、あるじと客、つくゑに「雲の時計」と「誕生と死」の二冊が置かれてある。

客 おや、鶯だね。まだこゑは穉いが。

主人 起きぬけに、毎朝來て鳴くよ。聲が整はないだけに、早春の感じがする。

客 眞田氏の詩集だね。(詩集をとりあげる)

主人 昨夜、晩くまで読んでゐたんだ。雑誌で「法燈の空」といふ一篇を發見してから、眞田氏の詩には注意してゐる。

客 あの詩はいいね。——<sup>薔</sup>薔に、はたはたと旅衣を拂へば、塵にはあらね、小天

使達、よりより法燈の古き空へと還つてゆくばかり……といふ末尾など、特に愛誦してゐる。いつたい、眞田氏の心靈的な幽暗の世界には、北歐の作家のもつ風土的な蔭翳とか、宗教的な神祕觀から滲みでた含みのある匂ひ、それに、漱石の「草枕」あたりの匂ひ、タゴオルの内觀の世界といったものが、細ひ交ぜされたやうな——

主人 さう。「誕生と死」には、たしかに、さうした傾向が讀めるね。君はタゴオルをひきあひに出したが、この詩集の「冬街道」といふ詩には、麻訶鉢特摩 Mahapadma といふ、ウバニシヤットの古代東洋思想につながりをもつことばと、溶解爐、電磁機、比較測定機、輕合金、さういつた近代的機械主義につながることばと、もうひとつ、「月光に睫毛を焦がす」とか、「墓に發砲する」とか、「火の葦もて碧空の壁に書く」といつた純粹な詩語の、凡そ三つの異質の世界から構成された、立體的な詩法が感じられる。その渾然と



した融合點に、眞田氏の築きあげた獨自性、——いはば「型」の創造といった仕事を感じられるね。

客

なるほど、それが佐藤惣之助氏のいふ「冷靜な智慧のアラベスク」だらう。この智慧のアラベスクの構成法に、佐藤氏のいふ句讀點と動詞の驅使の獨自さが、濃厚に感じられるが。

主人

さうだ。佐藤惣之助氏のいふ「詩句が内的な發情そのものをいかに知精の樂章として形態を改めてゐるか」といふ意味は、これは「雲の時計」への批判らしいが、もつとはつきりいひ改めるなら、眞田氏が思考の内在的な秩序づけに、いかに大きな彫琢の苦悶を代償としてゐるかといふ、詩人としての倫理のまへに、その思考——思想ではない——思考の秩序づけを、人間的なありきたりの情感の世界に足踏みさせずに、もつと高い孤獨な純粹性の把持に結びつけてゐる。その思考の發展は「雲の時計」を讀むと、いつそうよく理

解できる。「誕生と死」は、「雲の時計」から觀て、その幅と奥ゆきにおいて、劃期的な發展が感じられる。その彫琢の苦悶が、いたいたしいほどに僕には感じられるんだ。その思考の秩序づけの過程が、安易な平俗さを拒否する、峻烈なたかい精神を加へてゐる。いはば、超俗の非凡を目ざして、内部的なたたかひを執拗に續けてゐる。孤獨な詩人といふ感じがするね。

客

(「誕生と死」をめくりながら) 後記に「この歴史のゆゆしき時間のなかにあつて、詩とはまさしく美の實踐と體驗であるばかりでなく、行ユクであり力であり、そして終末的な救ひの思考である」と眞田氏が書いてゐるが、このあたり、君のいふ平俗拒否の精神の峻烈さのほか、内部的な思考のたたかひの迹があるのぢやないか。

主人

さう。さうした思考のあとは「雲の時計」では感じられない。いはば「誕生と死」では、眞田氏の思考は内部へ内部へとたちむかひながら、その詩法は

外部へ外部へと、夥しく擴がつてきてゐる。この二面の相剋のうへに詩法が立體化し、同時に著しい混沌クワイマスと未完の部面が、氾濫してきてゐる。それが不可知不可觸の奥ゆきと、彈力のある飛躍性を内包した幅を用意してゐるわけだが、この二面相剋の處理は、「誕生と死」以後の眞田氏にとつて、また一段の峻しい道だといへるし、それだけにあたらしい詩集の、發展のすがたが豫想できる。「誕生と死」以後、「歴史のゆゆしい時間の中にあつて」拂はれる苦悶の代償といふものは、どのやうな形になつて現はれてくるか、僕はたのしみにしてゐるんだ。

232

客 (詩集を閉ぢて) だいぶん理窟つぼくなつてきたやうだ。お茶でも貰つて失敬するでしょう。

主人 常用のハブ茶があるから、嚙んでゆきたまへ。

客 (立ちあがりながら) また、鶯が鳴いてゐる。鶯の音いろに誘はれて、ばかり

と梅がひらく、といふ風情だね。長閑だね。このあたりは。

(十九年三月中浣・高祖保)

233

## 發行者のことば

真田喜七氏の詩業については、もう「雲の時計」と「誕生と死」の二冊の詩集で、識者には充分解つてゐるし、その力量は何か壓迫する靜かな、深い力で、それを一讀した讀者の共感と感嘆を贏ち得てゐる。その力は華美な、目に著くやうな形でなく、じわじわと浸蝕するやうに進み、現在では氏の詩人としての存在は惑星のやうな光芒を放つてゐる。

氏の詩については度々所感を述べてゐるから、此處では只、氏の感情の繊細や、觀照の深さにその特徴があり、氏が人生の漂泊詩人であることなどを述べて、この詩集によつて初めて氏を識る讀者の爲めに、蛇足な註を加へて置かう。

氏も又、現代の國難に蹶起した詩人の一人だが、この詩集の作品を見ても、本當に大悟した態度があつて、便乗といふやうな淺薄な印象を與へないのは流石である。これは氏の

才能や詩人的稟性に據る處で、その態度にも又、世渡り詩人の性格が少しもないからである。氏は詩壇的には傍流をなしてゐる一つの存在だが、この傍流的存在は古來各國に於ても、文學史的に見ても重要な役割と地位を占めてゐるのを忘れてはならない。孤獨な、靜觀的な詩人は皆、かうした運命を背負つてゐる。

私達の住む神奈川縣には「神奈川縣詩文學會」といふ團體がある。氏もその會員の一人である。この詩文學會が、初めての事業として、氏の詩業を世に送ることも、この會の意義と價值を深からしめ、重からしめるものである。それに依つて、この團體の將來も期待できると信じてゐる。

昭和十九年二月二十九日

笹澤美明

## 卷末に

相模川（馬入川）のほとりに生れた私は、地理や氣象のうへでは、茅ヶ崎に二里餘で、海には近いのであるが、子供心に映つた印象からいふと、何の奇もない、むしろ漠然と北國を、雪國を、そして、驪氣ながら、刺すやうな澄明な周圍の自然を、自分の生れ故郷に感じながら育つてきた。それでごく幼少の記憶のなかには海はまだ入つてこなかつた。富士・足柄の山波と大山・丹澤の山塊とが、いつも遠景にある蕭條とした田圃の中で——恰度新潟市から一步入つた新潟縣下の大きな田圃から彌彦を仰ぎ瞻るやうな鹽梅に。けふの日になつても、私はまだ、旅から歸ると、奇もない私の寒村——現在は町であるが——の自然が、自分の眼にはいよいよ清澄なものに澄みまさつてくる。

母方の祖母の生家は代々の奢侈と歌誹諧に家運をかたむけ、宗匠をして一生を終つた。

私の母の従兄の代には、累代の家は酷く零落した。少年期には雲や流れ水や小鳥などを好きてあつた私は、中學校生徒となると、鎌倉の大倉山の上の星夜をすいた。その年代の後半をそこに過したせるもあらう。松や杉の暗い夜に鳴つてゐる大倉山の、黝々とした形と凜として諳かなそのあたりの夜の氣配をすいて、逍遙した。私は低い鎌倉の山から山の背をつたつて、西へ、北へ、東へ、と毎日のやうに飛びまはつた。そして、それはただ一人でなければならなかつた。私には美しい佛達に出逢ふことの悦しさがいつばいだつた。思ひがけぬ時に、全く思ひがけぬところから、その絢爛なみ佛達は現はれてくるのであつた。朽ちて見る影もない辻祠同様の雨除の中に、燦然としてみ佛は立つてゐた。おほくは地藏菩薩であつたが、まだ御顔の彩色も眞新しい、小像ながら得もいはれぬ美事な、作者不詳のみ佛達であつた。事實は朱も箔も剝落してゐたのだらうし、その數もごく稀れてはあつただらうが、それには、鎌倉木佛師等の見るべき氣魄、匂香が漾ふてゐたからであつた。日本の中世を一人でそこに發見した歡喜に打たれてゐた。さういふ佛體は、名ある鎌倉の寺々の闊い御堂の隅や、寺の庭の一隅には、なほ何體か幽玄なその微笑に歲月の災を

免れて遺つてゐるはずである。

誰にもさういふ時期があるやうに、自分勝手な俳句を私も手帳の端に書付けてゐた。蕪村を読み芭蕉にいたり、芭蕉と元祿に傾倒するに及んでは、私の句作はいつ知らずやんでゐた。しかし、何の成心もない古句の美事なのに傾倒することは意外にもながかつたのである。

文月や六日も常の夜には似す 芭蕉

桐の木に鶉なくなる塀の内 同

秋涼し手毎にむけや瓜茄子 同

蟹の家は小海老に交る龜馬哉 同

あるひはまた

行く秋の四五日弱る薄かな 丈草

灰捨てて白梅うるむ垣根哉 凡兆

などと、擧げ来れば、その時代に醸した感激は年を経て濃くならうともなほ稀薄にはな

つてゐない。

俳句と同時代に詩を書き、小説散文も些しは書いたが、ほんたうに元祿の句に打込んだやうな一時期は成年と未成年の境の私にはなかつたことである。私は人一倍晩く、ひくい鎌倉の山の背から中世の羅を透して、區翻られた社會とその先の海とを窺き、自己の外のものに眼を瞭いたのである。

處女詩集「樂章」の出版はそれから十年の、昭和八年秋のことである。福田正夫氏の手でまとめられて氏の主觀社が發行所である。實際の奔走は、氏の許にゐた林靜夫君が校正から上梓まで全部を荷負つてくれた。これは私等夫婦が茅ヶ崎の東海岸に借家住居をしてゐた二年足らずの間に書いたもので、一言にしていへば成心のない海邊の日記、作品としても散文詩風のもがおほい。滿洲事變の當時で國情も混沌をきはめ、日本の詩と文學も、主智といひ、純粹をいひ、國家や、國民性や、猶ほ人間の心の出來と神性を見失つて、袋小路に入りこんで足掻がとれず、個と物質の魔性の前に奇怪に出血してゐた。私一個の内部はこれに對して「樂章」の中の詩にも見られるやうな抒情的な表現を自己の周圍と文

學に對しとつたことが、今更のやうに顧られるばかりだ。詩集上梓と同時に、茅ヶ崎の家を引揚げ、横濱山下町に移り棲んだ。その後間もなく横濱市の社會教育課から市の青年團の新聞(月刊)が発行されることとなり、海港と船と鷗の薄暮の街の生活の傍ら、給仕と二人でその仕事をして二年餘をつひやした。恰度詩人田中令三さんが東京府でそのやうな雑誌や新聞を編行してゐたので、氏からいろいろお聴きしたことがあり、大佛次郎氏とはホテル、ニューグランドに書齋をおいておられた隣り合せの関係から夜に日に啓蒙していただいた。徳田秋聲先生父子、中河與一先生などが私のアパートに見へ、中河先生とは特に別懇であつた。松根東洋城は横濱に「澁柿」の同人を持つてゐたので、私の處でも句會を催したことがあつた。尾崎迷堂も出席してゐた。しかし句から私を遠ざけたのは僞らぬところ東洋城その人かshれない。昭和十年の夏秋の交世田ヶ谷の代田二丁目に移つた。私の借りた家は萩原朔太郎先生のお宅の附近で、その關係から先生には保證人になつていただいたのだが、先生をはじめてお訪ねした時、先生は、あなたが家賃を拂はなければ僕が拂ふんだ、ね。といはれた。さういふ結果になりますよ、と應へると、さうですかと先生

は屈托なく笑はれた。私も怡しかつた。その家屋は近くにゐるさる日本畫家の所有で、それまでは監督の内田吐夢がゐた家だが、鎌倉街道に面してゐて、私には落付いて原稿が書けなかつた。これは倉橋彌一君が探してくれ、すべての斡旋をしてくれたのであつた。叙述は後先になるが、山下町に移つてからの私には詩が書けなかつた。正確にいへば、大體山下町を中心とする五年の生活の間に、私の書いたのは「扉」「横濱山下町」「エリゼエの第一書」「鶴」の短い四篇だけである。その間の一夏を鶴沼で暮して「山房初秋之圖」「北越古刹之情」を物した。そのスランプのために、青年團の新聞を編輯したり、また代田に出て、同人雑誌「翰林」の同人として小説を書いたりしてみたが、小田急沿線の家でも私には一つの詩も出来なかつたのだ。そこは福田氏とも歩いて二十分以内の距離であつた。その年も暮になると惚惚とした山下町のアパートへ取つて返してゐた。このやうな状態は随分ながくつづき、次の詩集「雲の時計」を纏めるほぼ一年前までつづいた。

その第二番目の詩集「雲の時計」は、私と、書物展望社齋藤昌三氏との協力版である。先に言つたやうに詩が書けぬ間が五年もつづいた。その時間を、萩原先生や福田先生、或

は吉田一穂、山本和夫、野長瀬正夫、大毎にゐる詩人井上靖、笹澤美明、林静夫のごとく、ごく昵懇な先輩友人と徂き徂しながらも、可成荒涼とした一時期を通つてきた。一方にこの期間は私には、家庭といふより、自分の思想の力ではどうともならぬ、觀念としての田舎の家といふ解決できぬものが悲劇として自分に負はされてゐた。昭和十一年の一夏を中河與一氏一家は瀬戸内海の本島で送られたので私も十日ばかりそこに過したことがあつた。その暮になると急遽として田舎の家に歸ることとなつた私は、翌くる年の三月には妻は女兒を産み、これを歌子と名付けた。この字を、自詩の中で歌へ（うれへ）と用ひた隙しがあるからであつた。慣用例には當嵌らないかもしれないが。

佐藤春夫の「夕づつ」といふ詩に、私の記憶にして誤りがなければ、

きよく

かがやか

たかく

ただひとり

なんぢ

夕づつのごと

といふのがあり、その心は「歌」をうれへとよませたときのその一字につきるかのやうに前々かんがへたりしてゐたせゐからでもあらうか。

「翰林」はすでに解散となつてゐた。前の年の秋であつたか。その當時中河與一さんは清新潑刺たる同人雑誌を、と私に言はれた。しかし郷里にかへり、子供が生れたりして、十二年も三月四月となるうち、ある日、新たな雑誌について熱意ありや、否や、といふ書信が中河さんから私にとどいた。それで勿々に創刊號を出したのが新しい「言靈」である。それは日支事變勃發の當初であつた。中河さんは異常な熱意を示されたが、同人には島村利正君と私、それと坂本浩さんぐらゐのもので、七八號まで、私と島村君の二人でやつていつた。それからは坂本さんの努力で同人を獲得して、さらに別な内容を盛るところのものとした。こんどの「言靈」には私は一篇の創作も書かなかつた。ただしくは、日支事變の號外と同時に小説の筆を折つてゐた。創刊號に載せた短篇「娘ごころ」も翰林時代の未

發表のものをもつて充てたくらるだ。(これはその翌くる年作品社から五、六人の短篇集としてまとめて出版した。)小説を書かず、そのかほりにほつほつ詩を寄せた。詩がまた私にかへつてきたから。昭和十三年、十四年の間に二三十篇の詩作をしたのでそれを纏めて、「言靈」昭和十五年の四月號を私の詩の特輯としてくれたのは編輯の坂本さんである。同時に、單行本とすることに協力されたのは齋藤昌三さんで、詩集「雲の時計」は、この特輯號と内容をほとんどおなじくするもの、發行も四月と六月の相違である。

「雲の時計」は、私一個の人生では、もつとも足搔のとれない一時期とその内部の所産であるかもしれない。時代としても、二、二六事件から、日支事變が支那事變に發展し、日本のうちに戰爭景氣が進行中の困難な過程にあつた。然しこの詩集を出してしまふとそれからの私は比較的樂な氣持で詩作そのものに打込むことができた。氣持は内部へ動いてゐたのですなはち昭和十五年の後半から十六年、大體十二月八日の大詔の下る前後までのものを蒐めて、次の詩集「誕生と死」の一冊とした。山雅房川内敬五君が刊行してくれた。なほこの期間に詩人以外では、和田傳氏、楠崎勤氏や中村武羅夫先生などにも望外の

懇情をうけてゐる。

私ガもし奈良と、天平の佛達を知り、あるひはそのほかの吹息と環境の裡で人となつてゐたら、詩ももとより、いまこの私の眼も、相模と鎌倉を出て、別の時と處に息づいてゐたかもしれない。さうでもあらうが、私は長ずるにおよんで、壇の浦に沈んだ平家とその文學を、中世鎌倉とその藝道の理念より高く買はうとしてゐた。そしてそれも、その後に来る種々なる傾向の一つにすぎない。私はまた耶蘇の洗禮をうけ、學校も青山學院の英文科へ入つたのである。それから無秩序に思想の北歐と、西歐と、亞米利加を遍歴し、一頃は小説を書き一通りの文學青年の道を彷徨してきた。一方に、成年と未成年との界から絶えず私を窘めてはなれなかつたのは、農村と農民の物情、人情であつた。蕩搖する日本の現實が生身に刺を立てたのだ。その頃芭蕉とワアツワスとは、逸早く私の心のひかりであつた。ゲオルグも、リルケも、ヴァレリイも、ベギーも、ベルジャイエフも、レオ・シエストロフも、朔太郎もそれよりずつと後れてのことであつた。

譚はまた横道になるが、十三年一月父の遺骨を分骨して芝の増上寺に葬つた。その時大



鳥大僧正は色紙に「遊方外」と書いて来て、方丈の外でも各々念佛して下さい、と言ひながらそれを私に下さつたのだが、芭蕉の藝に遊ぶことはまことをむせることであるといふし、西歐の人もいつたやうに、生命の本質は戯れてある、それは宇宙の本質と戯れてある戯れてあるといふやうな意味は、いよいよ切實にせまるものがあるやうに想はれる、人の生はゆゆしい戯れてあると。

私の、住む寒川といふ處は、草創の相模に重要な關係のある邑闔であるらしく、農耕のはやく開けたところ、人智も他に魁けて啓けてゐたところに相違ない。一之宮寒川神社は、寒川比古と比女の二柱の御祭神が鎮まらせられ、それは歴史と共に古い神々のやうである。この寒川といふ地名は日本でここだけと限つたことはないが、相模といふ國と風土から攷察するとき、どうしても、歴史的な時間と位置の上に、一點の睛のやうな存在である。福士幸次郎さんは私に、あの人独自の研究から、「さむ」は「さぶ」で、「さぶ」は砂鐵の意だといつて頗に紅潮を呈してをられた。白柳秀湖氏は、我々の民族は鐵の優れた文化をもつ北方族で、其の利器で常世族と低文化民族とを鑑定したといふ説を立ててをら

れ、この民族は、海よりするとき、河口の上流二里ぐらゐの地點に根據をさだめ、そこから經營を擴充してゆくのが民族國覺きの定法だといふやうな説明もしてゐられた、私の記憶にして誤りがなければ、それとこれとにどんな關係もないとしても――。あるひはまたさぶ(寒)はアイヌ語だとする人もある。さがむ(さがみ)、あぶり山(雨降山)などのもつ濁音はアイヌであるといふのだ。いづれにしてもこの寒川の聚落は民族とともにふるいのである。寒川の町から二里餘り上流に國分(國府)と國分寺の遺跡があつて、この相模國分寺と尼寺薬師寺は、全國國分寺の中でも古いのだし、礎石の布置などもいまだに完璧にちかひ。薬師寺の門前、小田急國分驛のあたりで仰ぎ瞻る大山即ち雨降嶺と、その富士は、まことに相模を象徴するに足るものであらう。私達にはそこから澄明そのものとしての相模の國土の感情を物語る事ができるのだ。三輪山や耳成山が大和地方の感情を物語つてゐるやうに、その山の表現には相模の心と披差ならぬ根源的なつらなりを有つ。

「眞嶺刺し 相模の小野に 燒ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも」の御歌のその小野は相模川の西、丹澤と大山の東北麓玉川村小野にあつて、社は日本武尊を祀る、そこ

からもさまで遠くはない。

私は、自分の眼が、奈良や天平のみ佛達を視てゐたら、今頃は別の息吹の下で息ふてゐただらうとも書いたが、今再び、複雑困難を窮めた世相と時代を簡明直截に掴みきつた鎌倉の時代精神と、それに續く室町の藝道のある部門に嵩いものを私は感じてゐる。猶ほ後退の一途をたどつて、つひには江戸末期に衰滅した佛像彫刻の美のなかにも、三四の室町木佛師の地藏菩薩像における刀法と技法の冴えなどを、復古的にも捨てがたく貴しとするのである。それをどこまでも強引に相模に結びつけようなどといふのではなく。

248

足柄の箱根飛び越え行く鶴のともしき見れば大和し思ほゆ

作者未詳

この歌をここに引くことは、歌の心にはとほいであらうが、郷土につらなる血のせる

か、鎌倉の實踐をとほつて、徳川にいたつて學と道徳にまで華麗な展開を遂げた日本の武士道を懐ふとき、中世鎌倉をとほして寧樂平安の民族の感情のふるさとを感ずることが、私にとつてはさらに不自然ではないやうである。

結句、私は郷國から外に出ない私であるらしい。その頃低い山の脊から區切られた歴史の町を中世の羅を透してながめて、自己の他のものを窺いた少年は、戦ふ御國の偉きな運命の中からいま再び、現實鎌倉の時代精神の鏡の裡に民族の古を映しださうとしてゐるやうだ。

249

私はまだ未成品である。なにもかも猶ほ將來にあるらしい。上來述べきたつたところ、私は、詩集の發行の勞を取つてもらふ神奈川県詩文學會の好意と、そしてこの「夜雨す」を機會として私の詩と私をはじめて識つて下さる方々への、私一個の責任の上から、私はこの、ぶすぶすと燻り足らぬやうな身邊事を書きつづつた。編行にあたつて「雲の時計」と「誕生と死」の過去二冊のうちの比較的ながし詩は大部分を削除したことを蛇足として加へておく。

昭和十九年三月十八日 彼岸に入る日

相模に雪降りて

著者

250

夜<sup>よ</sup>雨<sup>あめ</sup>す

詩集 夜雨す 昭和十九年十月十日印刷 昭和十九年十月十五日發行 著作者 眞田喜七 發行者 神奈川縣詩文學會 代表者 笹澤美明 橫濱市港北區篠原町二二八 印刷者 共同印刷株式會社 東京都小石川區久堅町一〇八 發行所 神奈川縣詩文學會 橫濱市中區長者町五丁目七六 二百部限定版 第 冊 非賣品

著作略年表

樂章詩集 昭和八年 主觀社 (絶版)

雲の時計詩集 同十五年 書物展望社

誕生と死詩集 同十七年 山雅房 (絶版)

夜雨す詩集 同十九年 神奈川縣詩文學會 (非賣品)

○ 作品 創作集・共著 昭和十五年 作品社 (絶版)

詩物語 詩と創作・共著 近刊 (公報二十四)



911.56  
SA 61



終

